

提案趣旨説明書

〈作品タイトル〉

“W,E,D,O”のまちをつかい倒せ！

〈提案の趣旨〉

各地における共通した街の課題は、モータリゼーションにより商圈が郊外の大型店舗へ移ることで商店街に人が歩かなくなり、中心市街地が空洞化していることである。時代の移り変わりにおける役割の変化、商店街形態の終焉とみることもできるかもしれないが、外的要因と内的要因を併せ持つ衰退した街を如何に再生し新たな街とするかは難しい問題である。

三河安城駅周辺の街の形成は1988年の新幹線駅開業以降で、何もなかった安城ヶ原に明治用水が開削され、後に開発・形成されたことに似ている。ここは、過去の街形成に必然の、交通の要所や難所にあたる宿場町であったり、城下町や門前町にみるような「核」になる存在もなく、人が歩くことの無い環境にある。街の機能においても十分であるとは言えず日常の暮らしで歩く必然性はなく、滞在し交流が図られることもないゆえに賑わいは感じられない。

人が集まる理由とは何か？単純な話、そこに魅力があるからである。

それには様々な要素が関係する。暮らしに必要なものが手に入る、利便性が良い、遊び楽しめる、一体感がある、緑があり環境が良く安心でき、何かがあり何かが出来ると期待を持てる、等々である。

三河安城駅周辺はどうだろうか？整然としてきれいではあるが、機能・性能・デザインの基本的3要素がバランスよく満たされて魅力があるだろうか。大方の感想は、「ここは何もないよね、何か足りないよね」であり、まちが完成しているとは言えない状況にある。「使いたいけど使えない。使えないものは使わない」ということであり、現状では人は集まらず、歩かず、活気に満ち賑わう要素に欠けている。また、変化を期待してイベント等が開催されるが、それはひと時の賑わいでありまちが変わるには至らない。まちが「まち」となるには充実した日常の設えが基本としなければならない。

日常の設えに加え、何かがあり、何かが出来、何かを期待できて皆がワクワクする、そんな環境が「魅力あるまち」と私たちは考える。日常の必要を賄う基本の設えに加え、様々な機能を持つ設えが関連しながら各所に配置され、歩いてめぐり様々な世代が交流できるなら楽しい。

提示する計画案は、4年後のスポーツ・交流施設拠点としてのアリーナとの関連性を踏まえて、日常の必要を賄う施設に不足している要素を付加して、歩くまちを形成したうえで“まちをつかいたおす”ことを考えたいと思う。幸いにもエリア内には駐車場が比較的確保されており近隣からのアクセスにも有利な条件を備えている。駅前のロータリーには車を侵入させず人中心の空間として賑わいを生み出す設えとしたい。また、賑わいの要素となる歓喜、熱気、躍動感を感じられる設えを各所に設け、それらに関連させて安全に歩行移動してまちをめぐら構成とする。お仕着せでも人任せでもなく「まちをつかい倒したい」と思う人達が主体者となってまちをつくっていくことを願う。